

アジア諸国におけるがん登録とがん対策

佐藤 茂秋

神戸大学医学部衛生学講座

平成9年12月1～3日、神戸国際会議場にて「アジア・パシフィック地域の癌疫学と対策」についての国際シンポジウムが神戸大学医学部とタイ国マヒドン大学の主催、WHO等の共催で開催されました。インドネシア、フィリピン、タイ、シンガポール、マレーシア、ベトナム、中国、韓国、オーストラリア、日本からの発表に加え、D.M. Parkin博士にIARCの関連活動、S.T. Han博士にWHOのがん対策、富永祐民博士にがん予防、に関する基調講演を、それぞれ依頼しました。特に、いろいろな国におけるがん登録とがん対策の現状を発表し合い、問題点を討議して、より良い将来の方向を探る事を目的としました。

今回参加国の中で、地域がん登録が全国レベルで完備しているのは、オーストラリアとシンガポールです。インドネシアにはSemarangとYogyakartaに地域がん登録がありますが、より範囲を拡げる努力がなされつつあります。

フィリピンからは、衛生省によるRizalがん登録とフィリピン対癌協会によるManilaがん登録の二つの地域がん登録の紹介がありました。これら二つはお互いに共同して、現在730万人を対象としたがん登録になっています。その結果では、男性で頻度が高いがんは、肺、肝、前立腺、胃等、女性では乳房、子宮頸部、肺、卵巣等です。

タイではChiang Mai、Khon Kaen、及びSongklaに地域がん登録があります。これに加えBangkokでの横断的調査の結果が発表されました。これ等4地域でのがんの発生頻度は必ずしも同じではなく、男性では一般に肺がんが高いのですが、Khon Kaenでは男女共肝がんが高いのが特徴で、他の地域でも男性では肝がんが二位を占めていました。Khon Kaenの肝がんは80%が胆管がんで、肝蛭の寄生によるものですが、他の地域ではHBVによるものが大部分を占めていました。マレーシアではSarawakとPenangに地域がん登録があり、国は更に他の地域にもがん登録を設立しつつあります。

ベトナムからは、1988年に創設され約200万の人口を対象としたHanoiがん登録の現状が報告されました。ここでも、男性では肺がんの頻度が最も高く、次に胃、肝がん、鼻咽頭がん等が続き、女性では、乳がん、胃がん、肺がん、子宮頸部がんの順となっています。

中国では既に、何か所かに地域がん登録がありますが、このシンポジウムでは、広東省の省都、広州市で1996年に始まった地域がん登録の紹介がありました。

韓国では、1980年から全国的な病院登録が存在し、これがKorean Central Cancer Registryといわれています。地域がん登録は1983年からあった江華島のもののみでしたが、1991年からはソウルで大規模な地域がん登録が始まっています。その精度は全体的に見て日本の大阪府に匹敵します。癌発生頻度は男性で胃、肝、肺、大腸の順、女性では胃、子宮頸部、乳房、大腸の順で、大阪での順位とよく似ています。現在ではソウルのもを手本にして釜山、大邱、光州、仁川にも地域がん登録設立の動きが出はじめ、大邱における可能性調査の結果が別に発表されました。更に韓国政府は地域がん登録の予算化を決定し、地域がん登録韓国協議会が1997年11月に結成されています。

日本の地域がん登録からは、全国協議会と、宮城県、大阪府、兵庫県、広島市から報告がありました。

地域がん登録は効率よく運営されている所も、必ずしもそうではない所もあり、その理由としては、国による法的基盤のない事、人的資源と財政援助の不足等が挙げられ、日本での厚生省による援助の中止の予定は非常に残念な事で、韓国とは対照的です。

がん対策の現状についても、各国から報告がありました。アジア各国の対策も、他の先進諸国と同様、まず禁煙、食生活改善、節酒、肝がん対策としてのHBVに対するワクチン接種等が一次予防の中心です。肝がんに関しては、HBV由来の次はHCV由来のものが増加が予想され、輸血を介する感染の予防と共に麻薬中毒者の注射による感染の危険がタイの経験から指摘されました。この他、オーストラリアでの、紫外線に当たらないようにする事、タイ北東部での、肝蛭の寄生する魚を生で食べないようにする事、等も、その地域の特徴的ながんの予防策を示しています。

早期発見については、日本の老健法による様な集団検診は、他の国では全く行われていませんでした。しかし各国とも、乳がん、子宮頸部がんの早期診断には力を入れています。シンガポールにおけるマンモグラフィの導入についての科学的予備調査の結果や、日本での胃集検の効果についての発表もあり、いずれも有用性が強調されました。

がん対策にがん登録の結果がより有効に利用されるべきである、というのが、このシンポジウムの一つの結論でもありました。